

中部の

エネルギーを 築いた

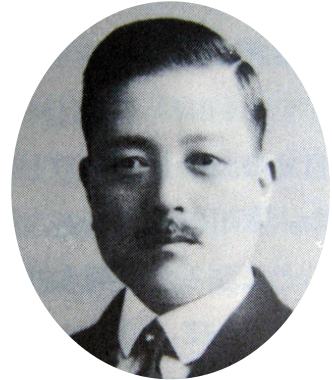
人々

木曾谷の夜明け ~その5~

大同製鋼、東海電極、
木曾川電力に貢献した 川崎舎恒三

大同製鋼(株)、東海電極(株)、木曾川電力(株)3社の設立に携わった共通する経営者として、福沢桃介、寒川恒貞、川崎舎恒三の3者が登場する。

このうち福沢桃介は「福沢桃介翁伝」、寒川恒貞は「寒川恒貞翁伝」が編纂されており、本誌でも福沢桃介は2008(平成20)年6月号から8月号、寒川恒貞は同年10月号に掲載した。今回は、従来あまり語られてこなかった製鉄製鋼事業、大同製鋼での功績、その生産に必要とされるカーボン事業に貢献した川崎舎恒三を紹介する。



川崎舎恒三

〔1856(明治19)~1954(昭和29)〕
(出典：東海カーボン六十五年史)

福沢、寒川、川崎舎の役割

経営者福沢桃介の立国の基礎は水力発電にあるという慧眼、電気製鉄製鋼事業の「機を見るに敏」から生まれる電気製鉄製鋼事業などへの経営決断、寒川恒貞の電気製鉄製鋼生産の技術開発、川崎舎恒三の寒川からの協力要請に応じて参加し事業化に向けて生産体制の確立、等から電気製鋼所と東海電極が設立された。このあたりの設立に関して、「電気製鋼所は、福沢桃介の先見性のもとに寒川恒貞が腕をふるって創設したとも言える。これに対し、東海電極は、寒川が独自に構想し、計画立案し、福沢の同意を得て、自らが出資者の中心となり創立の運びに至った。電気製鋼所と東海電極製造の二つの会社の創立に関する意思決定の過程には、このように福沢主導型と寒川主導型の二つのコントラストが見られる。」といわれる。

(1) (株)電気製鋼所設立当時

電気製鋼所は1916(大正5)年8月、名古屋電灯(株)熱田発電所に隣接する熱田工場に資本金50万円で設立された。名古屋電灯が資本金の50%、残りの50%は、福沢桃介、下出民義、寒川恒貞、井上角五郎、松永安左衛門などが出資した。役員には、

取締役社長 下出民義
常務取締役 寒川恒貞
相談役 福沢桃介

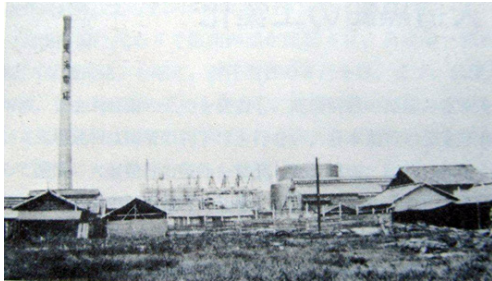
等11名が役員に就任した。

(2) 東海電極(株)設立当時

東海電極は1918(大正7)年に設立された。設立当初の概要は次のとおりである、

①本 社 東京市麴町永楽町1-1(東京海上ビルディング6階の1室)

- ②工場 名古屋市外、御器所村字上赤島2
- ③資本金 50万円(12万5千円払込)
- ④営業目的 黒鉛電極、炭素電極並びに各種黒鉛、炭素製品の製造・販売及びこれに類する諸般の営業
- ⑤役員 取締役社長 寒川恒貞
常務取締役 川崎舎恒三
取締役 福沢駒吉
(桃介の長男)
相談役 福沢桃介



昭和4年頃の東海電極名古屋工場構内

(3) (株)大同電気製鋼所と商号変更した当時

第一次世界大戦が1914(大正3)に始まり、わが国に鉄鋼ブームを興したが、大正7年に終結すると戦後の反動不況に襲われた。このため福沢桃介は、1921(大正10)、大同電力㈱の製鋼事業を分離させ大同製鋼㈱を設立、翌年7月、電気製鋼所の熱田、福島工場を併

合させ、大同製鋼から大同電気製鋼所に商号を変更、福沢桃介社長が退任し、寒川恒貞が社長に就任した。

- ①本店 名古屋市南区熱田東町字丸山60
- ②工場 築地工場、熱田工場、福島工場(木曾福島工場改め)
- ③資本金 280万円(株式総数：56,000株)
- ④役員 取締役社長 寒川恒貞
常務取締役 川崎舎恒三
相談役 福沢駒吉

(4) 木曾川電力(株)1931(昭和6)年7月当時

電気製鋼所は、1922(大正11)年、熱田、福島両工場を現物出資し、商号を木曾川電力と商号を変更して設立された。その後、昭和3年に福沢桃介社長から寒川恒貞に、昭和6年に寒川社長が勇退し下出民義の長男である下出義雄が社長に就任した。

- ①本店 東京市麹町区丸の内1-6(東京海上ビルディング新館8階)
- ②資本金 3,932,000円
- ③役員 取締役社長 下出義雄
取締役 寒川恒貞
川崎舎恒三
相談役 福沢駒吉

川崎舎恒三の生い立ち

川崎舎家は香川県高松市の豪商として知られ、川崎舎竹郎は1856(安政3)年、硝石製造のため、百両を投じ、長さ12間、横幅2間の塔を建設し洋式鉄砲や弾薬を製造した。さらに蒸気機関の試作、さらに前輪が大きく、足でけて進む自転車を作り、麻の洋服を着用して町を闊歩したと言われる。

川崎舎竹郎の孫である川崎舎恒三は、寒川

恒貞と同じ高松の出身で、1886(明治19)年に生まれた。地元の高松中学を卒業後、第一高等学校を経て、1910(明治43)年、東京帝国大学工科大学電気工学科を卒業した。その後、東海電極の社長に就任した寒川が、未開拓の分野であった炭素工業の事業化に取り組むことになり、同郷の川崎舎に協力を求めた。この頃の事を、

「寒川翁の警咳に接したのは私が一高に入ってからのこと、翁は既に電気界に活躍していた頃で、香川県人会の席上、同郷の先輩としていろいろご指導を受けた事に始まる。事業の事で翁と私との間に関係が出来たのは、大正三年秋の頃と思う。翁が海外より帰朝せられ、電気製鋼事業を計画中の頃である。…私が電気化学工業に従事したい希望を持っている事が、ふとした機会に久原房之助氏より福沢桃助氏の耳に入り、寒川翁は福沢氏の意を受けて私の勤め先会社(箕面有馬電気軌道・後の阪神急行電鉄)の専務小林一三氏の所へ私を招聘したき旨を申し入れられたが、その時は会社の都合で実現しなかった。けれどもこの時翁と私との間に適當の機会まで待機する默契が出来たのである。その後間もなく私は、讃岐化学工業会社を設立した。翁は用務で帰郷せらる度に私の工場に立寄られ、色々仕事の事について助言して下さいました。

大正6年暮れ、電気製鋼の新事業として電極製造会社設立の計画が進められるに及び、かねての約束に従い、私はこれに参加することになった。」とこの頃の事が「寒川恒貞伝」に記されている。

(1) 東海電極でメンダイン式連続焼成炉の設計

川崎舎はまず炭素工業に関する調査を寒川に委嘱され、秋田鉱山専門学校を訪問して文献を調査する傍ら、長野県田口の電気化学研究所に行き岸敬二郎、岸義男等がカーバイド、リン酸カリの研究、製造で使用していた電極等を比較研究した。また東京化学工業の保田技師に電極焼成炉の設計を依頼するとともに、自らアークカーボン製造に関する文献「マニューファクチャ・

オブ・カーボン」を入手し、その中に載っていたメンハイム窯を参考として、メンダイン式焼成炉を設計した。そこで、寒川に裁決を求め、当時の名古屋瓦斯の岡本桜社長、藤本憲治技師長の意見を参考に、川崎舎の設計図に多少の修正を加え採用することになり、藤本が設計を担当し、試験電炉が完工した。

(2) 大同メタルス式アーク炉を完成

川崎舎は、1922(大正11)年、大同電気製鋼所の常務取締役就任し、東海電極の常務から取締役になった。

1928(昭和3)年、電気事業視察のため欧米各国へ電気製鋼事業視察のため出張した。1930(昭和5)年、商工省から発明奨励賞の交付を受け、自動電流調整装置を造り、特許第87408号を得、その後の新設アーク炉にこの新装置を併置して大同メタルス式アーク炉を完成させた。そして定款を変更し、営業目的に電気炉製作工業を追加した。大同製鋼では昭和14年に専務取締役、昭和16年に副社長に就任し、1954(昭和29)年亡くなるまで勤めた。

ところで、日本の女優第1号と知られる川上貞奴と日本の電力王福沢桃介が名古屋で暮らした二葉荘は、1922(大正9)年に建てら



文化のみち二葉荘全景



貞奴愛用の品をおいた和室



1階大広間

れた洋風2階建て、和洋折衷の豪邸(敷地面積：約16,500㎡、延べ床面積：約3,960㎡)で二葉御殿とも呼ばれた。設計・施工は、わが国最初の住宅専門会社アメリカ屋であった。創建当時は、自家発電装置や屋根の上に庭を照らすソーチライトを設置し、福沢桃介が名古屋を拠点に活躍した時代、政財界人のサロンともなった。大正15年(1926)二人が東京に移転すると川上の養子夫妻が住んだ。その後1937(昭和12)年、敷地と建物が東西に二分割され、このうち西半分を川崎舎恒三が買

い取り、増改築して、1954(昭和29)年に亡くなるまで居住した。

その後、この建物は大同製鋼の寮などになっていたが、平成12年(2000)、文化財として寄贈され、名古屋市では、東区槇木町に創建当時の姿に移築・復元し、「文化のみち二葉館」として開館した。同館では、川上貞奴関連の資料や郷土ゆかりの文学資料を展示している。

なお、川崎恒三の簡単な略歴は次のとおり。

川崎舎恒三の略歴

1886	明治19	香川県高松で出生
1910	明治43	東京帝国大学工科大学電気工学科卒業 箕面有馬電気軌道に勤務 讃岐化学工業会社を設立
1918	大正7	東海電極(株)常務取締役就任(4月8日)
1920	大正9	(株)電気製鋼所取締役就任(4月20日)
1922	大正11	(株)大同電気製鋼所常務取締役就任 東海電極取締役就任
1928	昭和3	電気製鋼事業視察のため欧米へ出張
1931	昭和6	自動電流調整装置を発明、大同メタルス式アーク炉完成
1939	昭和14	大同製鋼(株)専務取締役就任
1941	昭和16	大同製鋼(株)副社長就任(昭和20年まで)
1954	昭和29	死去

(寺澤 安正)